日本人韓国語学習者における韓国語子音の発音に関する考察

―破裂音の教育を中心に―

A Study on the Pronunciation of Korean Consonants by Japanese Learners of Korean

－Focusing on the Education of Plosives－

権　英　秀
KWON Young-Su

Abstract

This paper discusses Japanese Korean learner's pronunciations of Korean lax mainly on plosives, and compares lax pronunciations of Japanese learners of Korean and those of native Koreans in terms of VOT.

The results of this study show:

1. The group that received the education based on the traditional theory was not able to distinguish Korean's lax pronunciations well. And native Koreans were not able to understand their lax pronunciations of Korean well.
2. But the group that received a part of the pronunciation education newly proposed by the author was able to distinguish Korean's lax pronunciations better. And native Koreans were able to understand their lax pronunciations of Korean better.
3. The group that received a part of the author's devised pronunciation education was faster than the group that received the traditional education in the speed of reading aloud.

Keywords : 音素（phoneme）　平音（lax）　破裂音（plosive）　VOT（Voice Onset Time）

０．はじめに

第２外国語学習者に対する外国語の発音はテキスト[1]に共通に書いてある発音理論に基づいた教育が多い。実際学習者が教わった発音教育どおりに発する音はいくつか母国語話

者が発する音と異なる場合がある。それは教育上母国語と外国語における共通の音素に基づいて教育されており、実際の音素の発し方かつ音の特徴に見られる違いまで繊細に教育・訓練されていないからである。たとえば、同じ/k/である日本語と韓国語の音でも、日本人と韓国人の発音は正確に違う発し方と（聞こえる）音になる[2]。しかし、音声学に詳しくない学習者にとって/k/という音は英語や日本語に似た/k/に喩えることによって、諸外国語の音も同音として認識し、発音するのである。

学習者の発音は場合によって母語話者が聞き取れなかったり誤解をしたりして、ちゃんと伝えられないおそれがある。よって学習者に対する外国語の発音は、母国語話者の認識する音に基づき、母国語話者の発音の発し方をより正確に発音教育に取り入れる必要性があると考える。

本稿は、日本人韓国語学習者が韓国語の子音の対立（平音・激音・濃音の対立）を知覚できず、うまく発音ができないことから（梅田1985、김・김2005、오・김2006、宇津木2009等）、日本語（清音と激音）と韓国語の子音（平音と激音と濃音）について比較考察し、日本人学習者を対象に既存の発音教育と違った方法で発音教育（破裂音を中心に）を応用し発音実験を行った。

1.「調査」

① 調 査 期 間　：2008年10月から2011年１月にわたって調査を実施した。

② 調査対象者[3]：日本人韓国語学習者50（A・Bグループ）人と韓国語母語話者15人を対象にした。

③ 調 査 方 法　：まず、日本人学習者に韓国語の文章（短文・長文）を読んでもらい、韓国人に聞かせながら、実際の音と異なる部分を指摘し、学習者の発した（聞こえた）発音と正しい発音を比較してもらった。また韓国人の発音を聞かせながら、日本人にその発音を書いてもらった。

表1）調査設定

（既存の理論どおり教育をうけた[4]） 日本人学習者の発音： 以下Aグループ（25人）	発音を聞いた韓国人にインタビューする。
韓国人の発音	発音を聞いたAグループにインタビューする。
（一部理論と異なった教育をうけた[5]） 日本人学習者の発音： 以下Bグループ（25人）	発音を聞いた韓国人にインタビューする。
韓国人の発音	発音を聞いたBグループにインタビューする。

２.「日本語」と「韓国語」の子音

日本語の子音は声（voice：声帯の振動）の有無によって、無声音と有声音に分けられる。無声音とは声帯の振動が振るえず発せられる音であり、有声音とは声帯の振動を用いて発する音である。以下のように日本語の激音が無声音に、清音が有声音になるのである。

表2）日本語の子音

無声音（激音）	有声音（清音）
/k/　カ、ク、ケ、コ	/g/　ガ、グ、ゲ、ゴ
/kʲ/　キ、キャ、キュ、キョ	/gʲ/　ギ、ギャ、ギュ、ギョ
/p/　パ、プ、ペ、ポ	/b/　バ、ブ、ベ、ボ
/pʲ/　ピ、ピャ、ピュ、ピョ	/bʲ/　ビ、ビャ、ビュ、ビョ
/t/　タ、テ、ト	/d/　ダ、デ、ド

しかし、韓国語の子音（19文字）は息（aspiration：気音、空気、気息など）の有無によって、無気音と有気音に分類される。無気音とは音を発する際に息が伴われない音であり、有気音とは息を伴った音である。

表3）韓国語の子音（今回①～③（平音の中で破裂音）を中心に考察する。）

無気音（平音、鼻音、流音）	有気音（激音）	無気音（濃音）
①ㄱ /k/	ㅋ /kh/	ㄲ /k'/
ㄴ /n/		
②ㄷ /t/	ㅌ /th/	ㄸ /t'/
ㄹ /r/		
ㅁ /m/		
③ㅂ /p/	ㅍ /ph/	ㅃ /p'/
ㅅ /s/		ㅆ /s'/
ㅇ /無音/	ㅎ /h/	
④ㅈ /tʃ/	ㅊ /tʃʰ/	ㅉ /tʃ'/

原則として韓国語の子音は有声音がない。ただし、一部の平音は語中の位置で有声音になる場合がある。上記の①～④の平音（ㄱ、ㄷ、ㅂ、ㅈ）が語頭に位置する場合、無声音の/k、t、p、tʃ/になり、語中では有声音の/g、d、b、dʒ/になるのである。

平音	語頭の場合	語中の場合
ㄱ	/k/	/g/
ㄷ	/t/	/d/
ㅂ	/p/	/b/
ㅈ	/tʃ/	/dʒ/

/ko＋ gu ＋ ma/
例：・고구마 ＝ 고 ＋ 구 ＋ 마　　：サツマイモ
/ta ＋ tʃi ＋ da/
・다치다＝ 다 ＋ 치 ＋ 다　　：怪我をする
/pa ＋ bo/
・바보＝ 바 ＋보　　：馬鹿
/tʃa ＋ dʒu/
・자주＝ 자 ＋ 주　　：よく

바보（/pabo/）の場合、ㅂの平音が語頭の場合（/p/）と語中の場合（/b/）に音が異なることが分かる。 即ち、同じ文字の平音であっても子音が置かれる位置によって学習者は無声音か有声音に発し分けなければならないことを発音教育で指導される。学習者は韓国語の音（音声記号）を､アルファベット（英語学習時習った音）として認識する場合、あるいは日本語の激音・清音として認識する場合がある。たとえば、語頭の無声音は日本語の激音（/コ/、/タ/、/パ/、/チャ/）に、語中の有声音は日本語の清音（/ゴ/、/ダ/、/バ/、/ジャ/）に認識するのである。今回の学習者のインタビューにおいても、50人全員が音声記号をアルファベットとして認識し、日本語の清音・激音と同じ音として考えていた。

３.「日本語」と「韓国語」の子音の位置づけ

同じ音素であっても、調音器官における筋肉の緊張さや調音時間の持続性、アクセント、気息の強さなど、さまざまな調音生成にかかわる要素によって変異音[6]が生じる。今回先

行研究のVOT（Voice Onset Time）のデータを元に、日本語と韓国語の子音の音について位置づけを試みる。

VOTとは、声帯が（閉鎖の状態で開放した時点）と（声帯の振動が始まった時点）の間の時間である。VOTの値は大きければ大きいほど、破裂の後に声帯の振動が始まり、逆にVOTの値が少なければ少ないほど、声帯の振動があった後に破裂することを表す。以下にShimizu（1996）と이（2000）のVOTのデータを参考[7]する。

表4）Shimizu（1996）と이（2000）のVOT

Shimizu：日本語は６人、韓国語は３人の被験者 이：日本語は５人、韓国語は20人の被験者		日本語の有声音（清音）			日本語は無声音（激音） 韓国語は平音[8]			韓国語の激音			韓国語の濃音		
		b	d	g	p	t	k	p^h	t^h	k^h	p’	t’	k’
Shimizu	日本語	-89	-75	-75	41	30	66	・	・	・	・	・	・
	韓国語	・	・	・	31	20	49	86	85	100	10	11	23
이	日本語	-22	-26	-12	31	34	38	・	・	・	・	・	・
	韓国語	・	・	・	46	54	66	55	63	73	12	12	21

日本語の破裂音について、有声音（清音）は負（マイナス）の数値で、有声音（激音）は正（プラス）の数値で現れている[9]。しかし、韓国語の破裂音（平音、激音、濃音）は日本語の有声音のように負の数値は見られない。つまり、韓国語の破裂音は声帯の振動が破裂した後に始まる音が多いことを意味する。宇津木（2009）は、「無声有声音›無声無気音›有声音」の順にVOTの値が現れるとも 指摘している。

서（2002）はVOTの値は気息の程度に比例すると言う。気息の程度は発声する際、吐く気の強さであり、「息の量」とも関わっている。上記のデータの値を「息の量」として分析すると、以下のようになる。

表5）日本語と韓国語の破裂音を発する際、吐く「息の量」

			韓国語の平音<日本語の無声音			
日本語の有声音	＜	韓国語の濃音	＜	?	＜	韓国語の激音
			日本語の無声音<韓国語の平音			

表４のVOTの数値に基づく「息の量」を比べると、日本語の有声音は両言語の破裂音の中でもっとも声帯の閉鎖が開放してから振動されるまでの値が少なく、持続性に従って息を吐く時間も短いことから､量も少ないと考える。一方､韓国語の激音はVOTの値がもっとも大きく、息を吐く時間が長いことから、吐く量も多いと予測できる。さらに韓国語の濃音は、日本語の無声音と韓国語の平音よりVOTの値が少なく、また日本語の有声音よりVOTの値が多いため、激音のように「息の量」を吐かず、声帯の振動があった後に破裂する傾向はないことが分かる。

４．問題点

日本人学習者は、語頭の無声音と語中の有声音を日本語の激音と清音に、あるいはアルファベットの音に喩えて認識し、韓国語の平音を発音している[10]。しかし、今回の韓国人は現在行われる理論（語頭と語中の場合における平音の使い分け）の発音教育を受けた学習者の発音に対して次のように認識している。

①Aグループの発音に対する韓国人のインタビュー

よく発音する[11]（正解）	激音に聞こえる[12]	場合によって違う
２人	11人	２人

②韓国人の発音に対するAグループの インタビュー

平音に聞こえる[13]（正解）	激音に聞こえる[14]	場合によって違う
５人	14人	６人

上記の①で分かるように、学習者の発音について韓国人は語頭の平音（/k、t、p/）は激音に聞こえると答えた人が多かった。これは学習者が認識している語頭の（/k、t、p/）が実際の発音では（/k^h、t^h、p^h/）に現れたということである。韓国語の破裂音の平音と激音は、調音器官と声帯の筋肉を適切に緊張や閉鎖をしながら（김・김2005)、弱く気音を吐く場合は語頭の平音に、強く気音を吐く場合は激音になるのである[15]。しかし、気音を吐くメリハリ、即ち「息の量」の調節は日本語学習者にとって難しいことである。

また、前節の表５において「日本語の無声音と韓国語の平音」はVOTの値の大きさを分けられなかったが、学習者は母語である日本語に当てはめて発した音（/カ、タ、パ/）が①のように韓国人が平音と激音の使い分けを正確に認識できない傾向、即ち、日本人学

習者が発した韓国語の音（語頭の平音）が韓国人に激音として聞こえたことから、日本人は韓国語の平音である/k/を日本語の激音/k/に認識し[16]、発音していることがうかがえる。したがって、⑴「韓国語の平音<日本語の無声音<韓国語の激音」のVOTの順に基づき、発音する際の吐く「息の量」を推測することができる。そして⑵韓国語の語頭の平音と激音を正しく発音し、使い分けられるような発音指導を行う必要があると考えられる。

例）

韓国語の語頭の平音	日本語の清音	韓国語の激音
가다　/kada/　：行く	カ　/ka/	카　/kʰa/　：CAR
바다　/pada/　：海	パ　/pa/	파　/pʰ/　：ネギ
비　/pi　/　：雨	ピ　/pi/	피　/pʰi/　：血

上記に表記された発音について、実際韓国人の平音に対する認識は若干異なっている。それは以下の通りである。

表6）韓国人が認識している平音

	語頭の場合	語中の場合	韓国人の認識（語頭・語中）
ㄱ	/k/	/g/	/g/
ㄷ	/t/	/d/	/d/
ㅂ	/p/	/b/	/b/
ㅈ	/tʃ/	/dʒ/	/dʒ（j[17]）/

例：　　理論　　韓国人の認識

/ko＋ gu ＋ ma/　　/go ＋gu ＋ma/

・고구마 ＝ 고 ＋ 구 ＋ 마　→　＝ 고 ＋ 구 ＋ 마

/ta ＋ tʃi ＋ da/　　/da＋ tʃi ＋ da/

・다치다＝ 다 ＋ 치 ＋ 다　→　＝ 다 ＋ 치 ＋ 다

/pa ＋ bo/　　/ba ＋ bo/

・바보＝ 바 ＋보　→　＝ 바 ＋ 보

/tʃa ＋ dʒu/　　/dʒa ＋ dʒu/

・자주＝ 자 ＋ 주　→　＝ 자 ＋ 주

表６における韓国人の平音に関する認識（語頭・語中）は今回15人全員が答えたものである。つまり、（平音の語頭、平音の語中、激音、濃音）の区別ではなく、韓国人は（平音、激音、濃音）の区別の方で認識しており、平音を発する際、語頭の無声音と語中の有声音の使い分けを意識しないことが分かった。

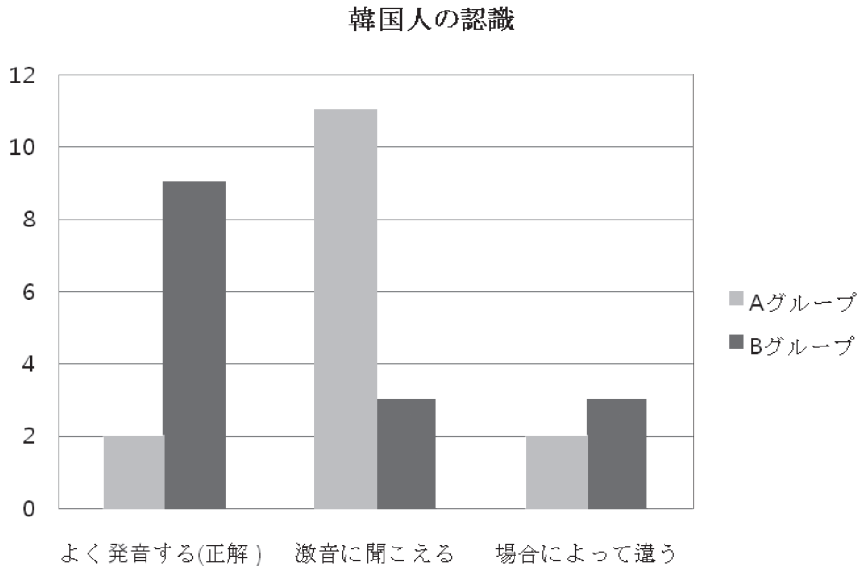
５．実験

韓国人が韓国語の平音（破裂音）に対して、語頭でも語中でも同じ音として認識していることから、日本人学習者（Bグループ）にも表６のように平音を１文字１音（音素）として教育を行った。その結果、語頭と語中によって平音を使い分けるように教育を受けた日本人学習者（Aグループ）と異なるデータが見られた。

①　Bグループの発音に対する韓国人のインタビュー

よく発音する（正解）	激音に聞こえる	場合によって違う
９人	３人	３人

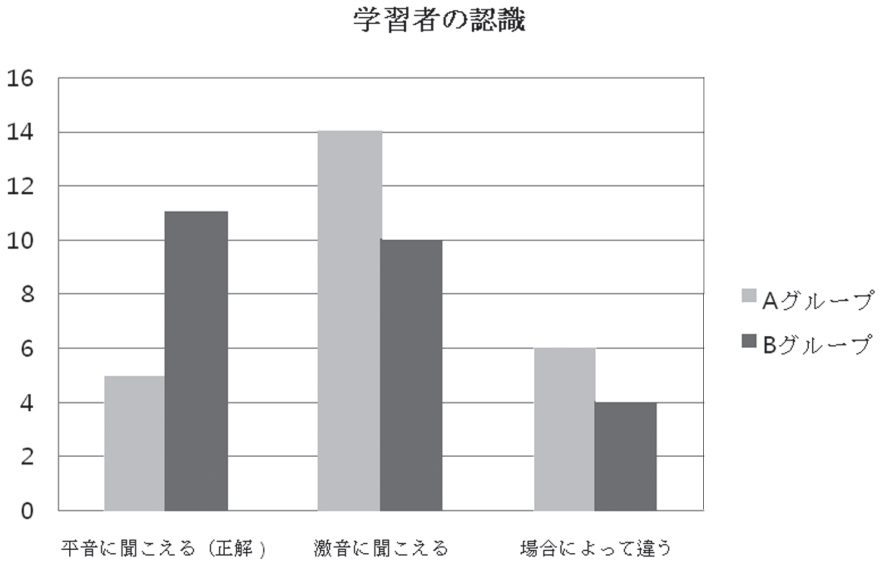
グラフ）Aグループとの比較



②韓国人の発音に対するBグループのインタビュー

平音に聞こえる（正解）	激音に聞こえる	場合によって違う
11人	10人	４人

グラフ）Aグループとの比較



理論どおり教育を受けたAグループの発音に対して、韓国人は「よく発音する」と答えた人が２人であった反面、韓国人と同じく平音を認識しているBグループの発音に対して、９人の韓国人は、韓国人から多く指摘された語頭の平音が激音に聞こえなかったと指摘し、「よく発音する」と答えた。また、平音を韓国人と同様に認識しているBグループは、理論どおり教育を受けたAグループより、韓国人の発音に対してより正確な発音[18]の聞き取りや書き取りもできたことが分かる。

さらに、韓国語[19]を読む速度においても、Bグループの方がAグループより読む速度が速かった。

Aグループ	Bグループ
58.5分／25人＝2.34分	44.11分／25人＝1.76分

韓国語は子音と母音の組み合わせで１つの文字になる。そのために、子音の音では①語頭と語中の平音の使い分け、②받침の発音、③連音化、そして母音では④韓国語の母音（ㅓ

/ㅗ、ㅕ/ㅛ、ㅜ/ㅡ、ㅟ/ㅢ）と似た日本語の母音（オ、ヨ、ウ、ウィ）の区別など、日本人は各子音と母音の発音ポイントを念頭に置きながら読まなければならない。また発音教育でも注意しながら指導される部分である。今回AグループよりBグループの方が読む速度が速かった１つの理由として、語頭と語中の平音の使い分けが無かったことが影響されたと考える。今回インタビューの中でAグループは「語頭と語中の平音の使い分けを気にしていた」という人が多く、Bグループでは1人も理由に挙げなかったのである。

６．まとめ

日本語と韓国語の破裂音は音素が同じでも、調音の仕方によって実際の音と異なる。また日本人韓国語学習者は教育で習った韓国語の発音をアルファベットあるいは母語の日本語と似た発音に喩えて韓国語を発音しているために、時には教育上正しい韓国語の破裂音を発音（生成）しても韓国人には聞き取ってもらえないおそれがある。今回先行研究の「VOTの値」に基づいて、日本語と韓国語の破裂音の位置づけを試みて日本人の韓国語発音の誤用を分析した。さらに現在理論と違って、韓国人が「語頭と語中での平音の使い分けを認識せず、１音として認識している」ことを、日本人韓国語学習者に応用し教育させた。結果、韓国人と同じく平音を認識しているグループは韓国人により多く発音を聞き取ってもらい、韓国人の発音を正確に聞き取れることが分かった。また読む速度も速くなったことが見られた。

注

1　参考文献を参照されたい。
2　詳しくは、第３節を参照されたい。
3　日本人は新潟大学生、韓国人は仁荷大学生である。
4　現在テキストに基づく発音教育を受けたグループである。
5　今回第５節で行った実験どおり、語頭と語中の平音について発音の使い分けを行わないように教育を受けたグループである。
6　김・김（2005）は、母国語話者は各々の音素として知覚できる音が外国人には同一の音素に知覚する場合があり、変異音も外国人には異なる音素として知覚される場合があると指摘する。
7　今回海外で発表された参考文献から引用・参考された内容については著者が日本語で訳した。
8　語頭の場合の平音である。
9　高田（2004）は、東京において大学生の有声破裂音がマイナスVOTからプラスVOTに移りつつあると指摘する。
10　今回調査対象者である日本人50人の答えである。
11　学習者の全体の発音について、韓国人が特に平音と激音の発音に違和感を感じなかったことを意味

する。

12　平音の発音が激音に聞きえた場合である。

13　韓国人の発音について、ちゃんと平音と激音の使い分けができたことを意味する。

14　韓国人の発した平音を激音で認識する場合である。

15　오・김（2006）は、音響の値が連合され、形成された特定の音響にも注意をしなければ、子音の区別ができないと指摘する。

16　他に韓国語の/t/と/p/を日本語の激音である/t/と/p/に認識している。

17　実際韓国人15人は/j/で表記した。

18　特に語頭の平音と激音の区別。

19　윤동주の서시（序詩）で測った。

参考文献

宇津木昭（2009）「日本語と朝鮮語の破裂音―音響音声学的研究の概観―」『北海道言語文化研究』第7号　北海道言語研究会.

梅田博之（1985）「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する韓国語教育」『日本語教育』第55号 日本語教育学会.

金 周熙（2007）「韓国語母語話者は無声・有声の対立をどう捉えるか」『 第7回 創立125周年記念特別シンポジウム予稿集』早稲田大学.

高田三枝子（2004）「日本語の語頭の有声歯茎破裂音/d/における＋VOT化と世代差」『音声研究』第8号 日本音声学会.

福岡昌子（2005）「韓国人学習者の日本語破裂音の縦断的習得研究―知覚―」『三重大学留学生センター紀要』第７号　三重大学.

Shimizu, K.(1996) *A cross-linguistic study of voicing contrasts of stop consonants in Asian languages.* Tokyo :Seido.

김 윤현・김 정오（2005）「일본인의 한국어 치경폐쇄음에 대한 변별학습이 양순폐쇄음의 변별지각에 미치는 전이효과（日本人の韓国語歯茎閉鎖音に関する弁別学習が両唇閉鎖音の弁別知覚に及ぼす転移効果）」『실험（実験）』제17권　한국심리학회（韓国心理学会）.

서 민경(2002)「한국어 파열음의 VOT에 관한 실험음성학적 연구―환경에 따른 VOT변이를 중심으로(韓国語の破裂音のVOTに関する実験音声学的研究―環境によるVOT変異を中心に―)」『언어연구（言語研究）』제18권 서울대학교언어연구소（ソウル大学校言語研究所）.

오 아림・김 정오（2006）「말소리 세기가 일본인의 한국어 폐쇄자음의 지각 및 학습에 미치는 영향（発音の強さが日本人の韓国語閉鎖子音の知覚および学習に及ぼす影響）」『실험（実験）』제18권 한국심리학회（韓国心理学会）.

이 경희・정 명숙（1999）「일본인을 위한 한국어 파열음의 발음 및 인지교육（日本人のための韓国語における破裂音の発音および認知教育）」『한국어교육（韓国語教育）』제10권 국제한국어교육학회（国際韓国語教育学会）.

이 형재（2000）「한국어 일본어 학습자의 일본어 발음 습득 연구―유성 무성 파열음의 발음을 중심으로―（韓国語日本語学習者の日本語発音の習得研究―有声、無声、破裂音の発音を中心に―）」『일본어문학（日本語文学）』제9권 한국일본어문학회（韓国日本語文学会）.

＊（）は著者訳.

<辞典>
『現代言語学辞典』（1988）田中春美他（編）成美堂.
『朝鮮語大辞典』（1985）大阪外国語大学朝鮮語研究室（編）角川書店.
『日本語教育辞典』（1983）日本語教育学会編 大修館書店.

<テキスト>
『改訂版韓国語レッスン初級Ⅰ』（2003）金東漢・張銀英（著）スリーエーネットワーク.
『韓国語講座１』（2009）金東順（著）白帝社.
『基礎から学ぶ韓国語講座初級』（2005）木内　明（著）国書刊行会.
『新好きやねんハングルⅠ』（2009）高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク西ブロック編集チーム（著）白帝社.
『総合韓国語１』（2001）油谷幸利・南相瓔（著）白帝社.
『朝鮮語を学ぼう』（2003）朝鮮語学研究会（著）三修社.
『日本人のためのはじめての韓国語』（2008）玄充鍋（著）白帝社.
『ミニマム韓国語』（2006）高秀賢（著）国書刊行会.
『みんなの韓国語１』（2009）吉本一・中島仁・石賢敬・曺喜徹（著）白帝社.
『やさしく学べる韓国語初級』（2009）金三順・北村唯司（著）白帝社.
『가나다KOREAN초급１』（1997）엄태상（著）랭기지플러스.
『한국어초급Ⅰ』（2000）김중섭（著）경희대학교국제교육원한국어교육부.